

新連載

四つの季節の鉄道ものがたり
第一話

夏

花火を追いかけて

家のすぐ脇を線路が通っている。白い車体に青と黄色のラインが入った、すつきりした電車が走る。朝の通勤時間帯を除き、普段は一両編成（一両でも編成というのだろうか?）、三十分一本通るだけの路線だ。

それが、年に二回だけ、無礼講になる。無礼講というのもおかしな話だが、長年ここに住んで、空いた電車のどかに走っていく様子ばかり見ていると、乗客でいっぱいの中が二両もつながっていることが無礼講に見えてくる。どこかでお祭りが?

お祭り——といえるかもしれない。えちぜん鉄道が無礼講になる日。一日と、八月十日前後。元日と、花火大会の日だ。えちぜん鉄道三芦線は福井と三国を結んでいる。ここには初詣

でにぎわう三国神社があり、また、七千発の花火が打ち上げられる三国花火大会の会場も近い。

三国へは車で行くものだと思うていた。市街地を抜け、田舎道を海へ向かってどんどん進むのは、いつだって気分がいい。

「花火大会の日は無理だよ」

笑ってそういわれたときは、だからがっかりした。

「春江のあたりで渋滞するから、車の中から花火を観ることになる」

渋滞、という言葉が似合う町ではない。田んぼや畑に挟まれたまっすぐの道が渋滞するなんて考えたこともなかった。

「電車も楽しいよ」

そういわれて、しぶしぶうなずい

た。ほんとうはふたりで車で行ききたかったのだ。私は若かった。ドライブがよかった。せつかくの花火大会なのに、ぼろぼろの電車に乗っていくのは興ざめだと思った。

でも、電車に乗った。強く反対を主張できるほど私はまだその人と親しくなかったし、できればおとなしくていい子に思われたかったんだと思う。夏の夕方、浴衣を着込んで乗った電車は、扇風機の風も窓からの風も足しにならないくらい暑かった。熱かった、というほうが近いだろうか。これから始まる花火大会を楽しみに集まってきた人たちのわくわくとどきどきが、車内に満ちていた。これからみんな花火大会を観に行く、にぎやかなパーティーの一員になったような気がし

宮下奈都

イラスト・岡林玲



みんな

CONTENTS

Vol. 42

2012

◎日本民営鉄道協会とは？

昭和42年に社団法人として設立され、71社の民営鉄道会社で組織されています。
輸送力の増強と安全輸送の確保を促進し、鉄道事業の健全な発達を図り、
もって国民経済の発展に寄与することを目的とした活動を行っております。
なお、JR各社や公営地下鉄などは加入していません。

12

鉄道と電気

電気はどのようにして届くのか。

◎西武鉄道株式会社 代表取締役社長 社長執行役員
白山進（2012年4月23日インタビュー）

08

安定輸送と 利便性向上、 節電の両立に 向けて。

TOP INTERVIEW

特集／鉄道と電気
「さらに効率的なエネルギー利用へ」

04

電気鉄道の省エネルギー化

◎工学院大学工学部電気システム工学科 准教授 高木亮

02

四つの季節の鉄道ものがたり——第一話 夏 花火を追いかけて

◎作家 宮下奈都

鉄道の未来学——基調報告③

みやしたなつ

作家 福井県生まれ。上智大学文学部哲学科卒業。
2004年『静かな雨』が文芸界新人賞佳作に入選。
2007年、初の単行本『スコレNo.4』が話題を呼ぶ。近
著に『田舎の紳士服店にモデルの妻』『誰かが足りない』。最
新刊に『窓の向こうのガーシュウィン』（集英社）がある。

REPORTS

安全輸送を担う、 電気と技術。

◎西武鉄道株式会社 鉄道本部電気部電力課長 齋藤大輔
◎西武鉄道株式会社 鉄道本部車両部車両課長 藤澤利之

Chapter I

鉄道を支える電力の安定供給。

Chapter II

鉄道技術とエネルギー効率の向上。

みんなでつだより

26 「オモシロ駅長」が活動開始／

新駅の名称は「西山天王山」駅に

みんなでつキッズ Station

27 『私とみんなでつ』小学生新聞

コンクール」を紹介

連載⑩ 地方民鉄紀行

28 小湊鐵道株式会社

連載⑫ 大正・昭和の鳥瞰図絵師 吉田初三郎の世界

神戸有馬電鉄沿線名所図

◎首都大学東京非常勤講師 藤本一美

た。いつもはがらがらの電車がその日
だけはぎゅうぎゅう詰めで、このあた
りでは「渋滞」と同じくらい縁遠い言
葉だった「満員」を私たちはしあわせ
な気持ちで味わった。
花火は期待をはるかに超えて見事
だった。帰りの車内は、行きとは別の
熱気で包まれていた。連帯よりも共犯
に近いような、乗客たちの興奮した
顔。心地よい疲労。潮風と汗のお
い。

ふりかえればすぐそこにある懐かし

※三国芦原線

い記憶のはずだったのに、冷静に数え
てみたら四半世紀以上が経っている。
三芦線は昔のままで、鉄道会社は変
わった。古かった電車はきれいになっ
た。私も大人になり、あの人とはもう
会わなくなった。それでも、うだるよ
うな夏の夕方、あの電車に乗って終点
で降りれば、夢のようだった花火大会
がまだそこで開かれているような気が
するのだ。